

明治とデザイン

—— 井手馬太郎 ——

緒方 康二

—— 1 ——

東京工業大学の前身が「蔵前」と通称されていた東京高等工業学校であり、1874（明治7）年東京開成学校内に設置された製作教場に濫觴する、工業教育機関としての長い伝統を有することはよく知られているが、東京高等工業学校あるいは東京工業学校の一時期に、デザイン教育部門としての工業図案科が設置されていたことは案外知られていない。工業図案科が、開設より廃止まで僅か17年という短期の存在であったこととともに、わが国近代デザイン史の研究が最近ようやく端緒についたばかりで、この工業図案科の存在意義がデザイン史のテーマとして論じられなかったことも、知られなかった理由の一端をなすものと考えられる。

工業図案科は、1897（明治30）年、先ず東京工業学校附属工業教員養成所内に設置され、次いで本科工業図案科の設置をみたのが1899（明治32）年であるが、1914（大正3）年には、明確な理由もないままに文部省令により突如廃止となった。この間、僅か17年という短期日の存在であったが、工業図案科がわが国近代デザイン史上に残した足跡は大きい。

工業社会に対応したデザイナーの養成を目的とするこの工業図案科の特色の一つに、教員スタッフがある。当時としては数少い、海外におけるデザイン教育経験者を、工業図案科開設当初より教員スタッフに加えていることである。1873（明治6）年のウィーン万国博覧会を機に、ウィーンで組織的にデザインを学んだ平山英三がその一人であり、本科工業図案科開設に当っては、アメリカで美術を学び、次いでイギリスでデザインの教育・実務の両面にわたり研鑽を積んだ井手馬太郎が、副科長として迎えられている。当時にとっては特異な、これら海外デザインの経験者によって薫陶を受けた工業図案科学生の中から、わが国におけるデザイン指導書の嚆矢ともいえるべき『一般図按法』を著し、海外デザイン文献の紹介を通じてデザインの教育・啓蒙に当たった小室信蔵が生れていることは、東京高等工業学校工業図案科の特質を象徴する出来事として注目すべきであろう。

上に挙げた平山・井手・小室は、工業図案科創設期における教授陣容の中核をなし、工業図案科におけるデザイン教育の基盤を築くとともに、当時の社会に対するデザインの啓蒙にも多大の

緒方：明治とデザイン

力をなしている。中でも井手馬太郎は、別稿においてその経歴の一部を紹介した¹⁾が、そこに見るように極めて特異な海外活動経歴を持ち、筆者の強い関心と呼ぶところであった。彼は10年にわたる海外生活を終え帰国後、直ちに東京工業学校本科工業図案科副科長に任ぜられながら在職7年にして在野に転じ、「美術統合社」と称するデザイン事務所を経営するかたわら、美術記者のための機関「サクラ倶楽部」を設立するなど幅広い活動を継続しつつも、帰国後11年目の1910（明治43）年、41才で早世している。帰国後の活動も、海外でのそれに劣らず変化に富んだものであるが、本稿においては帰国後の活動の基盤を形づくった井手馬太郎の海外生活にスポットを当て、調査の結果知り得た範囲につき紹介し、次いで帰国後の彼の報告書にみられる、デザイン改良意見に触れてみたい。

— 2 —

井手馬太郎については、『明治文化史』（美術編）に断片的に触れられており、他の美術関係文献にもその名は散見されるが、まとまった紹介は殆んどなされていない。井手のわが国におけるデザイン活動の期間は、長期にわたる海外生活を終えて帰国した1899（明治32）年より、没年の1910（明治43）年にかけての11年間のみである。彼の活動の一端は、井手が会の中心にあった大日本図案協会の機関誌『図按』や、この『図按』の廃刊間近い1905（明治38）年に創刊された雑誌『技芸の友』の記事、あるいは、東京高等工業学校工業図案科副科長として審査官の任に当たったいくつかの博覧会の記録よりうかがい知ることが出来るが、その経歴について知られるところは少ない。没後の略歴の記録としては、『明治過去帳』があり、ここでは「井出馬太郎、美術統合社主幹、装飾図案家」として以下簡単に紹介されている。井手の存命中のもので、やや詳しい経歴の紹介があるものに『審査官列伝』がある。これは1903（明治36）年大阪で開催された第5回内国勸業博覧会の折に、博覧会出品物審査の任に当たった審査官の経歴紹介を内容として同年金港堂より刊行されたもので、経歴の記載も1903（明治36）年までとなっている。

本稿においては、井手馬太郎の海外における活動を中心にとりあげるため、上記2編の経歴中、それぞれ海外生活についての記述部分のみをとり出してみる。

『明治過去帳』

廿二年米国に渡航し桑港美術学校に入り廿七年倫敦美術学校に遷り卅二年帰朝東京高等工業学校教授に任じ図案科を設くるに力あり。（傍点筆者 以下同じ）²⁾

『審査官列伝』

二十二年二月北米合衆国へ渡航し、同年加州桑港リンゴ^(マツ)ルン学校へ入学し、普通学及び語学を兼習す廿三年北米加州「シャスタ」郡ウイリヤム・メギー氏所有の銀鉱山会計員に聘さる、廿五年加州大学美術部へ入学し、二十八年修業証を受け、尋て美術及び貿易視察の為め中央亜米利加、南米及び合衆国東部諸州を漫遊す、同九月欧州大陸に渡り、十一月英京倫敦市美術家ウイリアム・アダムスの門に入る、廿九年六月同市グリニチ敷物株式会社図案師に傭聘せられ、又ニュークロス美術学校夜学部に入學し、同月農商務省実業練習生を命せら

る、三十年同市に於て井手図案所を設立し、専ら図案製作に従事す、三十一年ニュークロー
ス美術学校修業証を受け、三十一年五月倫敦市図案協会試験に合格しエムエスデーの章を受
け、三十二年五月帰朝す、同六月東京高等工業学校図案科教授を嘱託せられ、工業図案科副
科長となる³⁾。

これら二つの経歴記述には微妙なくい違いがある。ロンドンにおける美術学校への就学時期に
2年の差がみられ、また関係美術教育機関名も異なっているが、本稿においては、存命中に作成
された経歴として『審査官列伝』中の記載に従うこととする。

井手馬太郎の海外生活は、滞米期間と滞英期間の2期に分けて考えることができる。

井手がアメリカへ渡航したのは、1889（明治22）年2月である。『審査官列伝』に従えば、同
年語学をマスターするため、サンフランシスコの「リンゴルン学校」へ入学したとあるが、当時
「リンゴルン」として該当する学校は存在せず、Lincoln School の誤記と思われる。Elemen-
tary School の一つであったこの学校は現存しない。アメリカにおける井手の就学状況のみをた
どると、同じく『審査官列伝』によれば、1892（明治25）年より1895（明治28）年にかけて「加
州大学美術部」に在籍し、修業証書を受けたとある。一方、『明治過去帳』では、単に「桑港美
術学校に入り」との記載にとどまり、在籍期間は不明である。

井手と同じくサンフランシスコで美術を学び、英国に渡って水彩画家としての名声を得た牧野
義雄の著作に、アメリカでの4年間の修業時代の思い出を綴った『あさきゆめみし』があること
は別稿で触れた⁴⁾。井手馬太郎は、この牧野の美術学校の先輩として、また渡英後の協同生活者
として本文中に数回登場するが、この中に井手のサンフランシスコにおける就学機関を推定させ
る次の文がある。

この学校には古来一人か二人の日本人学生が始終通学して居た。井出^(マツ)午太郎君と慶応義塾
から来た夏井潔君は私の入学前に修学を終ったが（中略）井出君は欧州に渡りもっと勉強す
るため、その学資を作らねばならぬと言っていなかのホテルのクックに雇はれ、相会うこと
が不可能であったが手紙で始終交際して居た⁵⁾。

「この学校」とは、牧野が1893（明治26）年11月に入学したサンフランシスコの、これも本文
に従えば「ホップキン美術学校」、正しくは Mark Hopkins Institute of Art であり、現在も
なお、San Francisco Art Institute として活動が続けている、アメリカ西海岸では有数の伝
統ある美術学校である。明治期にアメリカで美術を学んだ画家は数多いが、その第1号として18
93（明治26）年に帰国し、三宅克己らに強い影響を与えた高橋勝造⁶⁾もこの卒業生である。高
橋の就学期間は、1885（明治18）年より1891（明治24）年までの6年間となっている。上の引用
文よりみれば、牧野の入学した1893（明治26）年には、井手はすでにサンフランシスコ美術学校
（以下本稿では、特別に必要な場合を除き「サンフランシスコ美術学校」と通称する）での就学
を終えており、『審査官列伝』の記述内容よりみて、1891・2（明治24・5）年頃の在籍と考える
のが妥当であろう。残念ながら、1906（明治39）年サンフランシスコを襲った大地震により市の
大半が灰塵に帰しており、井手馬太郎の在籍を裏づける記録のほか、当時のカリキュラム等の記

録の一切は失われている。

『審査官列伝』において1892（明治25）年より1895（明治28）年まで在籍となっている「加州大学美術部」についてであるが、カリフォルニア州立大学美術学部は、この時点ではまだ公式に設置されていない。美術学部が公式に設置されたのは1923（大正12）年であり、その起源は1800年代末の州立大学の School of Engineering 部門にさかのぼる。当初はフリーハンド・ドローイングと恐らくはデザインの原理も教えられていたとのこと⁷⁾であるが、ここにおいても古い記録は失われており、井手の在籍は確認できない。

さて、井手馬太郎が就学したと思われる「サンフランシスコ美術学校」は、当時 Mark Hopkins Institute of Art と通称され⁸⁾ていたが正式名称は California School of Design であり、1871年3月28日に設立された San Francisco Art Association 付設の美術教育機関であった。この San Francisco Art Association は、地域社会の芸術振興を目的として設置されたもので、School of Design が置かれたのは、1874年2月8日のことである。アメリカにおける専門的美術教育機関としては、1805年フィラデルフィアに設置された Pennsylvania Academy of Fine Arts が最も古い。19世紀半過ぎの1859年には、ニューヨークに Cooper Union Art School が開設されたが、California School of Design はこれらに次いで古く、この時期にサンフランシスコがこうした芸術的事業を組織し得たことは、大変興味深い。この California School of Design が Mark Hopkins Institute of Art と通称されていたは、1893年以降1906年までの13年間である。

その教員スタッフについては、『あさきゆめみし』の中で次のように触れられている。

校長はアーサー・マシュー君といって年は三十五、六才、青年時代パリに留学中はブーランジェーの門下で特別の優等生として評判高く（中略）助教授はデュランという三十才前後のフランス人、肖像画の教諭はクーナスというドイツ人、景色はイエーランドという四十才を越したイギリス人であった⁹⁾。

先に洋画家高橋勝造を、サンフランシスコ美術学校の卒業生としたが、『明治大正文学美術人名辞書』の高橋勝造の項には次のようにある。

明治十八年渡米して桑港画学校に六年在学し、ヘンリーゲーツ、マセウス、エーランド等に学び¹⁰⁾。

ここにいる「マセウス」が、牧野のいう「アーサー・マシュー」即ち Arthur Frank Mathews (1860～1945) であり、「エーランド」が「イエーランド」Raymond Dabb Yelland (1848～1900) と対応し、高橋も牧野も、同じサンフランシスコ美術学校に就学していたことが判る。なお「デュラン」は Anedee Joulin (1862～1917)、「クーナス」は Oscar A. Kunath (?～1904) である。「ヘンリーゲーツ」については知り得ない。

井手馬太郎の滞米期間である1889（明治22）年より1895（明治28）年までの間は、牧野の挙げた4人の教員中3人は、いずれもサンフランシスコ美術学校在籍中であるので¹¹⁾、井手が彼の滞米期間中のどの時期にこの美術学校で学んだとしても、これらの教員より教えを受けていた筈で

ある。

牧野により「校長」として紹介された Arthur F. Mathews は、1890年より大地震によって学舎が灰塵に帰する1906年までの16年間、校長の任にあった。

経歴が示すところでは¹²⁾、Mathews は単なる画家・美術教育者ではなく、カリフォルニアにおける室内装飾を中心としたデザイナーとしてもその名をとどめている。このことは、Mathews の生徒に対する影響力が、単に絵画という狭い領域にとどまらず、多方面にわたる幅広いものであったと想像される。

— 3 —

明治期にアメリカに渡った美術を志す日本人の多くにとって、アメリカはヨーロッパ留学のための資金かせぎの場であった。アメリカは、日本の苦学生にとって、働きながら学べる理想の地であり、また美術水準からみれば、当時はまだアメリカ独自の美術が十分な評価を得ていた時代ではなく、美術の研鑽のためには、アメリカ人でさえもヨーロッパを目指した時代であった。

6年余の長期にわたるアメリカでの生活を終えた井手馬太郎は、1895（明治28）年9月、ヨーロッパ大陸に渡った。その後の4年に近いヨーロッパ生活の殆んどの時期を、井手はロンドンで過している。『審査官列伝』にみる井手の、ロンドンにおける活動は華々しい。

まず、1895（明治28）年ロンドンにおいて「美術家ウィリアム・アダムス」の門に入ったとある。このウィリアム・アダムスについては知り得ていない。

翌年の1896（明治29）年には、井手がデザイナーとしての地位を築く意味で重要な、3つの活動が始まっている。いずれもこの年の6月よりとなっているが、第1に、「グリニチ敷物株式会社」にデザイナーとして雇われたこと、次いで「ニュークロス美術学校夜間部」に入学したこと（1898〈明治31〉年修了）、そして「農商務省（海外）実業練習生」に選ばれたことである。更に1897（明治30）年には、ロンドンで「井手図案所」を設立し、1898（明治31）年には Society of Designers の会員にもなっている。

井手がロンドンにおいてかかわりを持ったと思われる各々の組織において、井手との関連を示す具体的な資料は今のところ見出し得ていない。ただ、それぞれの組織について知り得たところは次の通りである。

「グリニチ敷物株式会社」として、当時より存続している企業としては、Greenwich Carpet Warehouse が考えられる。また「ニュークロス美術学校」は、現在もなおロンドン大学の Goldsmiths' College (School of Art and Design) として、ロンドンの New Cross に存続しているが、Goldsmiths' College に残されている記録は1906（明治36）年以降で、井手が夜間部に在学したであろう当時の専攻コース・カリキュラム・教員スタッフ等については、残念ながら資料がない。

「井手図案所」がいかなる組織であったかも不明である。ただ、井手のサンフランシスコ美術学校の後輩に牧野義雄のあることは既に述べたが、その著書に『滞英四〇年今昔物語』がある。

緒方：明治とデザイン

これには、牧野が滞米生活 4 年後、先輩としての井手馬太郎を頼ってロンドンに渡り、以後約 40 年間滞在したイギリスでの生活の思い出が綴られているのであるが、その冒頭に

パリ通の桜井氏の勧めに従ひ一八九七年十一月美術研究の目的でパリに行った。

ところが紹介状の宛先である骨董商の林正さんが一九〇〇年開かれる世界大博覧会準備の
為帰朝して居ない。私は知合ひも金もなし途方に暮れ、サンフランシスコ美術学校の先輩井
出^(マ)太郎氏を頼って十二月八日ロンドンに渡った。そして井出君と同居しながら一緒に壁紙
やクレトン (cretonne: カーテンや椅子カバー用の丈夫なさらさの一種 筆者注) のデザイ
ンをやっていると¹³⁾

とある。牧野がロンドンに渡り井手との共同生活を始めるのは、文中にあるように 1897 (明治 30) 年末からであり、『審査官列伝』の記述に従えば、井手がロンドンで図案所を開設した時期に当る。図案所におけるデザインの対象の一部が、壁紙やクレトンであったことが推定される。

井手が会員となった Society of Designers の設立は 1896 (明治 29) 年である。その目的とするところは、デザイン技術およびデザイナーの社会的地位の向上とデザイナー間の交流を計ることにあった。『東京高等工業学校一覧』明治 35・36 年版の職員一覧では、井手馬太郎について、「ピー、メンバー、ヲブ、ソサイチー、ヲフ、デザイナー (ロンドン)」とあるので、井手はその Private Member であったと考えられる。

さて、井手のロンドンにおける活動の中で、わが国と最も深い関連のあったのが、農商務省海外実業練習生としての活動である。

この海外実業練習生制度については、『農商務省第十五回報告 明治二十八年度』に次のようにある。

又外国貿易拡張ノ為メ左ノ六項ノ事業ヲ施行スルヲ目的トシ二十九年ヨリ五ケ年間施行ノ見込ヲ以テ一ケ年六万円ノ予算ヲ提出シ貴衆両院ノ協賛ヲ経テ裁定セラレタリ

第一農工商高等会議第二海外商況視察 第三海外実業練習 第四商品見本ノ発送 第五商品試験製造 第六海外商況報告¹⁴⁾

更に実施年度に当る 1896 (明治 29) 年には、次の方法で人選を行ない、海外実業練習生制度をスタートさせた。

海外実業練習生ハ東京、大坂、京都、横浜、神戸等ノ其地重ナル商工業者其他製産地ノ重ナルモノニ推選セシメ其中ニ就キ希望者ノ性質、品行、学業、経歴ヲ調査シ最モ適当ト認ムル者ヲ選択シテ之ニ補助ヲ給スルモノトセリ但練習生補助ニ関シテハ特ニ内規ヲ設ケ之ヲ標準トシテ許否シ其補助ヲ与フルモノニハ命令書ヲ附シテ常ニ一定ノ事項ヲ報告セシメ且其在留地ニ在テハ我公使館領事館ニ於テ之ヲ監督セシムルモノトセリ¹⁵⁾

1896 (明治 29) 年度第 1 回練習生は 10 名で、このうち「習業地：倫敦 業務：諸織物意匠模様 人員：一」とあるのが、井手馬太郎を指す。従って井手は、海外実業練習生の第 1 期生ということになる。

なお以上にみるように、海外実業練習生制度は当初 5 年間施行の予定であったが、『農商務省

『商工彙報』などによれば、少なくとも1913（大正2）年頃までは継続されている。この制度が実施に移され始めた明治30年代初頭は、例えば貿易行政の面からみても、貿易品陳列館の設置（1896＜明治29＞年）、あるいは日清戦争勝利の影響もあって、それまでの貿易面での不平等を改正するための関税定率法が制定される（1897＜明治30＞年）など、デザインが対象とするわが国軽工業発展の素地が着々と準備された時代である。これらの状況を反映して、実業練習生の数は1896（明治29）年の10名より1900（明治33）年は前年度よりの継続者を含めて58名に漸増し、1906（明治39）年度には117名、1907（明治40）年度は144名の多数にのぼっている。前記両年度中のデザイン関係練習生は、それぞれ10名・8名である。

ちなみに、『農商務省商工彙報』の巻末に掲げられている「農商務省海外実業練習生一覧表」より、デザイン関係のみ抽出し、上記2年にわたって表にすると次の通りとなる。

表1 農商務省海外実業練習生一覧表—デザイン関係

1906（明治39）年度

1906年12月1日現在

派遣地	対 象	練習生氏名
巴 里	美術工芸図案	出 口 清二郎
“	工芸品意匠図案	浜 訓 良
ブラッセル	銅器陶器原型及図案	武 石 弘三郎
紐 育	意匠図案	沢 田 誠一郎
“	工業図案	森 田 茂 樹
“	意匠図案	河 辺 正 夫
“	漆器図案	小 川 三 知
“	金属彫刻及工業図案	田 雑 五 郎
上 海	図 案	毛 利 教 定
孟 買	工芸図案	勝 田 良 雄

1907（明治40）年度

1907年12月10日現在

派遣地	対 象	練習生氏名
巴 里	美術工芸品図案	出 口 清二郎
“	染織図案	津 田 亀治郎
“	図 案	白 瀧 幾之助
“	木材彫刻	畑 正 吉
倫 敦	室内装飾及彫刻	高 村 光太郎
紐 育	図 案	鹿 島 英 二
“	意匠図案	古 田 土貞治
ボストン	美術工芸図案	谷 口 新次郎

農商務省商工局編『農商務省商工彙報』明治39年第12号、明治39年12月
および明治40年第14号、明治40年12月巻末、農商務省海外実業練習生一覧
表より作成

練習生としての期間は2～4年であり、デザイン関係で「一定ノ事項ヲ報告セシメ」、それをまとめたものに、1909（明治42）年3月農商務省商工局刊行の『欧米各国美術工芸図案ニ関スル報告』がある。ここでは白滝幾之助が「英仏両国連合博覧会ニ於ケル装飾美術ニ就テ」、高村光

緒方：明治とデザイン

太郎が「英国ニ於ケル応用彫刻ニ就テ」、武石弘三郎が「白耳義国ニ於ケル美術工芸品意匠図案」、小川三知が「米国ニ於ケル流行ノ洋灯ニ就テ」をそれぞれ報告したものが図版入りでまとめられており、小川三知の報告中には、ニューヨークティファニー社の名もみえる。

井手馬太郎が何編の報告書を本省に寄せているかは明らかでない。ただ管見の範囲では、1898（明治31）年5月30日付 発行の『農商務省工務局臨時報告』第4冊輸出陶器に、同年2月15日付で在ロンドン 実業練習生井手馬太郎の名で、「輸出陶器」と題する本文約5ページ、図版5葉の報告書が現存している。織物が練習生としてのテーマであったが、井手の報告はこの枠を超えた陶器にも及んでおり、農商務省工務局も「当業者参考上必要の資料たるを認め」¹⁶⁾ 印刷して関係業者に配布している。

また、『農商務省第十九回報告 明治三十二年度』には

本年度ニ於テ外国貿易拡張ノ参考トシテ視察及実業練習生ノ報告並ニ各種ノ報告書ヲ印刷ニ付シ当業者ニ配布シタルモノ左ノ如シ¹⁷⁾

として井手馬太郎意匠図案調査報告書が挙げられている。残念ながらこの報告書は未見であり、内容は不明である。ただ、同じ『農商務省第十九回報告』に、

出版図書……工芸品ニ関スル意匠調査報告として

「商工局臨時報告 三十三年 第十一冊」 工業図案改良并輸出品意匠模様¹⁸⁾の記載がある。この報告は、『商工局臨時報告』では＜工業図案法改良意見＞¹⁹⁾として＜図案師井手馬太郎＞の名で発表されている。文中に、

余は先年英国よりの報告中に「海外貿易品即ち日本より欧米諸国へ輸出する商品の図案は成るべく輸出先の図案に模写せざる可からず」との趣旨を述べ其実際の事情を報告したることありしか²⁰⁾

とあるが、先に触れた「輸出陶器」の報告にはこの内容は見当らない。1899（明治32）年度の井手報告の趣旨は、翌年帰国後の＜工業図案法改良意見＞に反映されているのではなかろうか。

井手は海外実業練習生に選ばれると時を同じくして、「グリニチ敷物株式会社」にデザイナーとしての職を得、夜間部ではあるが「ニュークロス美術学校」に入学、のちには「井手図案所」を設立、Society of Designers に入会するなど、デザイナーとして教育・実務の両面にわたっての研鑽を積むとともに、社会的存在としてのデザイナーのあり方についても知識を深める機会を得ており、教育・産業の両面にわたって、より正確な海外デザイン情報を伝え得る、海外実業練習生としては最も望ましい人材であったといえる。彼の報告が、当時の輸出産業の当事者、あるいは輸出行政の当事者にとって貴重な内容を含むものであったことは、想像に難くない。

— 4 —

井手馬太郎が＜図案師＞として＜工業図案法改良意見＞を発表した1900（明治33）年当時は、

井手は東京工業学校本科工業図案科の副科長であった。1899（明治32）年設置当初の本科工業図案科の教員スタッフは、次の通りである。

講師 図案法 科長 工業教員養成所講師 平山英三

同 図案法 図案実習 副科長 井手馬太郎

同 図案法 前田健次郎

同 工芸史 高等商業学校教授 横井時冬

助教授 図画 図案法 図案実習 島田佳矣

同 図画 絵画 図案実習 河辺正夫²¹⁾

このうち、平山・前田・島田は、東京工業学校附属工業教員養成所工業図案科設置以来の工業図案科教員スタッフであり、本科工業図案設置に伴い新たに加わったのは井手・横井・河辺の3名である。このうち、工芸史の横井時冬を除く2人が実習関係の専門教科担当であるが、河辺正夫は1889（明治32）年に東京美術学校図案科を卒業したばかりであり、海外での実務経験の深い井手に、大きな期待が寄せられていたと考えられる。副科長の要職が与えられていることはその現れであろう。

＜工業図案法改良意見＞を著した当時の井手は、帰国後少なくとも1年を経過しており、教育・実務の両面にわたる、わが国のデザイン事情を把握し得る立場にあった。帰国後間もない時期で、海外デザイン事情とわが国のそれとの差異が鮮明に感ぜられたせいであろう、＜工業図案法改良意見＞では、問題点の指摘とその解決策が具体的かつ素直に描かれている。

＜工業図案法改良意見＞は全文27ページ、400字詰原稿用紙にして約40枚程度の量である。内容は大別して、「工業図案法改良に対する具体的提言」と、「輸出貿易品の図案・意匠に対する諸注意」より成っている。前者は僅か8ページをついやすのみ、後者については残りのページを使って、漆器・織物等の具体例を引きつつ論を展開しているが、前者において、当時のわが国のデザイン事情をふまえて行なわれている具体的デザイン改良法の提言は、教育の場における井手馬太郎の指導法の一端を示すものとして興味深い。

またこの改良意見が発表された1900（明治33）年は、わが国の近代デザイン運動に重大な転機をもたらしたパリ万国博覧会参同の年でもある。当地での日本製品への評価がデザイン改革を要求する声となって現われ、デザイン改革推進のための諸活動が展開されたことは既に別稿で触れたが²²⁾、こうした反省の上に立った活動の展開は1901（明治34）年頃より活発化しており、むしろ井手馬太郎の＜工業図案法改良意見＞は、パリ万博の成果にかかわりのない、井手の海外経験をもとにした独自の見解として評価されるべきであろう。以下改良意見に示されたタイトルを追って、内容を紹介してみよう。

＜工業図案法改良＞

この項において井手は、従来日本のデザイン製作過程にみられたステップ、即ち

第一 参考品を求むること

第二 参考品を模写すること

第三 運筆の巧妙を務むること

をとりあげ、特に第2, 第3点について批判を加えている。

第1点については、「今日の図案家が図案の材料として諸種の参考品を蒐集するは素より異議なき所」としてこれを認めているが、第2点については

参考品を蒐集するは可なりと雖も単に之を参考品として取扱はず其一部若くは全部を模写するに至りては全然同意する能はざる所なり（中略）従来の我国図案家か一般に此参考品模写を以て唯一の図案法となせる傾向ありしは大に図案の発達進歩を害したるか如し²³⁾

として、参考品模写がもたらす弊害をいましめ、参考品よりモチーフを流用することはあっても、少なくとも構成は変更すべきだとしている。井手馬太郎が在籍した当時の東京工業学校工業図案科は、カリキュラムにデザインの実技として図案実習と工場実習を置いていたが、そのうち図案実習は絵画に次いで履習時間が多い教科であった。然もその内容は、

図案実習ニ於テハ工業品及応用美術品ノ意匠並ニ図案ヲ授クルニ在リ而シテ其方法ハ内外新古ノ図案様式ヲ知ラシメ各工業品ノ標本ヲ写シ形状組織模様ノ配置色彩ノ配合ヲ示シ以テ金物、木具、漆器、陶磁器、玻璃、七宝、織物、製版等、下図ヲ新案セシム²⁴⁾

であり、様式の学習とその再構成が中心であったことを示しているが、ともすれば様式の学習即ち模写に比重のかかり過ぎる傾向にあり、オリジナリティーに欠けるきらいがあったものと想像される。この問題の解決策は、次の項である「模写の風を長じたる要因」で論ぜられるので後にふれることとする。

次いで、第3点の「運筆の巧妙を務むる事」であるが、ここで井手は、彼の実務経験に照して次の指摘を行なっている。即ち

一の図案を作るに当りて其運筆を巧妙ならしめんと欲し毎に数葉の下書を為すは今日我邦の図案家が務むる所なり然れとも（中略）図案は決して図案の儘に用ひらるる者に非ず必ず一旦工業家の手に帰し工芸品に写し出されて始めて世に行はるゝ者なり図案家にして若し此理を知らずんば図案の運筆に過大の労を費やして其割合に好結果を得る能はざるの愚に陥らんのみ²⁵⁾

として実例を敷物にとり、図案の線にいかん運筆の巧妙を極めても、実際の製品においては線は織目の中に表現され、運筆の効果が充分現れない場合が多い。運筆の巧妙に勉めることを不必要とはいわないが、運筆に過大の労をさく暇があるならむしろ構成を考え、一つのテーマに対していく種類ものデザインを作成することに時間をついやすべきであると述べている。

<模写の風を長じたる原因>

先に井手は、模写の弊害と運筆技術への偏重を、当時のわが国におけるデザインの問題点としてとり上げたが、その原因を

維新以来外国人の（中略）今日の日本美術を評し天平足利及至徳川時代の美術に及はすと云ふ者あり之を耳にしたる日本人は一も二もなく軽々しく之を信じて美術家も一時に懐旧の情を起し頻りに古書画を珍重し（中略）美術学生は皆古画を左右に置きて之を模写するに全

力を傾くるに至りしかは図案家も亦自然に模写の外新案を工夫する者なきに至りしか如し²⁶⁾としている。美術教育史の観点よりすると、明治30年代初頭は欧化思想に裏うちされた鉛筆画系臨画教育にとって代って、国粹主義的思想のもとに毛筆画臨画教育が全盛を極めていた時代であり、美術教育の総本山ともいべき東京美術学校においては、岡倉天心の建学の精神を受けて

特に古画や古典の鑑賞や臨模を重んじて、其れに依て当時の現代的解釈或は自分のものとして取入れるやり方で、一体に其頃は欧米の、所謂新しいものの崇拜熱の盛な時代であったにも関はらず、反対に古美術研究を重んじて、之に依て一歩進んだ新時代作品を構成すべき抱負を以て、其基礎的勉強に熱中して居たのです²⁷⁾。

という実態があった。従って美術学校より見れば、東京工業学校工業図案科は

これは専ら西洋の聲に倣ふて現代にする平易な実用向き図案を描くにあったので、美術学校の図案の如く日本の伝統を根帯としての高尚なる趣味のものとは同日の論では²⁸⁾ないということになる。

ともあれ井手馬太郎は、模写および運筆の巧妙を極めんとすることによりもたらされる弊害をなくし、デザインの改良進歩を計る方策として次の3点を提起している。

第1点はデザインの基礎として、写生を重視したことである。即ち

写生に重きを措くと云ふは写生を其儘図案に用ふるの意に非ずして図案の材料を成る可く写生に取る可しと云ふにあり²⁹⁾

と述べ、写生を基礎としてデザインを考えるこの方式は、すでに工業図案科1年生に試み、好成績を得たと述べている。この模写を排し写生を重視する井手の考え方は、彼のデザイナーとしての活動に、サンフランシスコ美術学校でつちかわれた描写力が役立ったことにあるものと考えてよい。後に彼が設立の中心にあった大日本図案協会の機関誌『図按』の第13号において、「図案教授法私見」³⁰⁾を発表しているが、ここにおいても模写にたよることは図案の進歩を阻害する一大原因であり、「図案家たるものは、森羅万象を知悉し、又、之を描写し得るの技能なかるへからず」として描写力の重要性を説いている。また雑誌『技芸の友』の創刊号における「素人図案研究者の爲め東京高等工業学校図案科長井手馬太郎氏談話」においても

図按と申しましては絵画の力を応用して図按をなすものなれば（中略）図按を研究する前に必ず図画を少しく研究せねばなりませぬ³¹⁾

としてスケッチの説明より始めていることなどは、井手がデザインの基礎として写生を重視したことの現れであろう。東京工業学校工業図案科における、このスケッチを基本に置いたデザイン展開の技法が、附属工業教員養成所工業図案科第1期卒業生の小室信蔵により、欧米の文献を参照しつつ方法論としてまとめられていった過程については、別稿で触れた通りである³²⁾。

井手が＜工業図案法改良意見＞の中で、デザイン改良のための第2点として掲げたことは、

既に写生を基礎として図案を作らば次に参考品を参照して其図案を適当に変化し且つ之を応用すべき工芸品の形象性質用途を考へて其図案が果して其工芸品に適するや否やを研究³³⁾することであつた。ここでは図案は工芸品に「応用すべき」ものであり、当時対象としたデザイ

緒方：明治とデザイン

ンがパターンデザインを主流としていたこと、そしてあくまで器物に応用されるべき性質であったことを物語っている。ただ、この第2点における「工芸品の形状性質用途」を考えることが、輸出仕向地での風俗習慣等の文化的背景をも考慮に入れるべきことを説いている点は、注目すべきである。

第3点は、すでに運筆の項で述べられたように、テーマに対し出来るだけ多くのデザインを作成し、多くのデザインの中から最良のものを選択し得るよう配慮すべきであるとの提言である。以上の3点をもってデザイン改良の方策とし、この3点に注意を払うことにより、進歩改良が期待出来ると述べている。

続いて本論は、〈輸出品用の図案〉、〈貿易品の意匠〉に移り、花筵・漆器・織物・縫箔について19ページ、全文の約3%がこれらの項目についてやされている。紙幅の関係上、ここでは〈輸出品用の図案〉の内容に触れるにとどめるが、この項で井手は、先に注20で引用した「日本より欧米諸国へ輸出する商品の図案は成るべく輸出先の図案に模写せざる可からず」との見解を、扇子を例にとって説明している。即ち、貿易業者の言によれば、洋風のデザインよりは日本調デザインの方が輸出品としての評判がよく、「日本図案」こそが輸出品に適したデザインであるとのことであるが、「日本図案」として好評をもって迎えられているデザインの実態は、モチーフこそ日本調であるが、西洋の嗜好に照して「西洋化したる日本図案」であり、純粹の日本伝統美術が評価されているのではないとし、扇面のデザイン2葉を解説に添えている。ここに示される2葉の図中、第1図は「西洋風を加味した」図案、第2図は「日本固有扇子」となっているが、そこに現れる差異は、第1図では日本調の種々のパターンが扇面全体に展開されているのに対し、第2図ではパターンとしての松が一隅にまとめられ、扇面における余白部分も構図の中に生かされたものとなっている点である。

デザインがまだオーナメントと深く関連していたヨーロッパでは、余白を生かした日本的構成は、デコレーションではあってもオーナメントとしては評価されていない。このことは、J. Ward の *The Principles of Ornament* (4th ed. London. 1899. 初版は1892年) の第1章の冒頭に、日本のデコレーションとそれをオーナメントとし修正した図版を例に掲げて、日本伝統の構図が、オーナメントとしては不適切であるとの解説がなされている例からもうかがえる。〈輸出品用の図案〉の結語で井手が、「輸出工芸品の図案は必ず之を輸出先の画風に模倣するを要す」と述べているのは、上にみたヨーロッパにおけるオーナメントの考え方が反映された提言とみることが出来よう。

— 5 —

1906（明治39）年、工業図案科副科長としての在職7年目にして、井手馬太郎は東京高等工業学校を退いた。その後は、デザイン事務所「美術統合社」の主幹としてデザイン活動を継続しており、この「美術統合社」よりの記事が、幾度か雑誌『技芸の友』に寄せられている。

退職に先立つ1905（明治38）年10月、雑誌『図按』第35号の19ページに次の内容の記事がみら

れる。タイトルは「井手馬太郎氏の美術及美術工芸品々評会及其の図案研究所」とあり、美術工芸品の陳列所を京橋区の宗十郎町二番地に置いたと紹介されている。その図案研究所は所員4名、井手の他、東京美術学校日本画撰科1903（明治36）年卒の伊藤竜涯、東京高等工業学校図案科選科1905（明治38）年卒の滝忠郎、水野年方門人柴崎美方であった。一般の需要に応じ、1注文につき2～3点のデザインを用意するとあるのは、先に述べた「運筆の好妙に苦心するよりは、デザインの点数を多く」との井手の考えのあらわれであろう。デザインの対象として掲げられているのは、レッテル・カット・絵葉書・ピン・メタル・染織図案・陶磁器・漆器などであるが、需要の多いのは印刷関係、中でもレッテルが一番で、次いでピン・メタル類、その他は少ない。この井手図案研究所が「美術統合社」の前身であろう。

井手が東京高等工業学校を退き、1910（明治43）年9月18日に没するまでの約3年間の活動を明らかにする資料は少ない。『明治文化史』（美術編）には、簡単に次のように触れられている。

東京高等工業学校の教職を捨て批評家となった井手馬太郎は一九〇七年（明治四十年）に美術統合社と称する美術図案社を設立すると共に、美術記者の機関として「サクラ倶楽部」を作り、日本美術協会に属しながらも、工芸の新運動を起した³⁴⁾

井手馬太郎にとって、帰国後僅か11年の期間は、海外での経験をもとにわが国のデザイン界に新風をもたらし、改革の実を挙げるには短か過ぎたと思われる。むしろ志半ばにして世を去ったというべきかも知れない。

しかし彼の活躍した明治30年代は、わが国近代デザイン史の中では最も大きいデザイン改革運動が行なわれた時期に当り、それだけに彼の存在は短期ではあったが、わが国のデザインの発展に大きな影響を与えている。

本稿においては、明治期のデザイン教育・啓蒙に特異な足跡を残した井手馬太郎の、主に海外生活に視点を当て、概説してみた。

なお本稿作成に当り、次の方々から適切な助言・指導・資料の提供をいただいた。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

San Francisco Art Institute, Anne Bremer Memorial Library: Harry Mulford 氏

San Francisco Public Library: Mary Ashe さん

University of California, Department of Art: Karl Kasten 教授

University of London, Goldsmiths' College, School of Art and Design: Peter Steel
学部長補

Design Council: Benedict Austen 工業デザイン教育局長

京都教育大学: 日野永一助教授

注

- 1) 拙稿「明治とデザイン—小室信蔵の方法論—」『夙川学院短期大学研究紀要』第4号 昭和54年6月参照
- 2) 大植四郎『明治過去帳』昭和46 東京美術 182ページ
- 3) 『審査官列伝』明治36 金港堂 29～30ページ
- 4) 前掲『夙川学院短期大学研究紀要』第4号参照
- 5) 牧野義雄『あさきゆめみし』昭和31 暮しの手帳社 124ページ
- 6) 三宅克己『思ひ出つるまゝ』昭和13 光大社 78ページには次のようにある。

恰もその時米国桑港より新たに帰朝された高橋勝造画伯が沢山作画を持ち帰られ、偶ま明治美術展覧会に出品されたが、それ等の作品を見るに付けても、とてもこれは日本に安閑としている秋では無いと思った。

特にその水彩画は、日本人の作画として今までに観たことの無い精巧を極めたと云ふより、寧ろ詩趣に富んだもので、桑港の絵画も日本のそれとの比では無いと、勘からず驚歎した。

ここにいう「明治美術展覧会」は、1894（明治27）年10月11日から11月末まで、上野公園で開催された明治美術会第6回展で、黒田清輝・久米桂一郎の滞欧作品の他、高橋勝造の滞米作品が、油絵の他に20数点の水彩画を加えて特別展示されたとのことである。（外山卯三郎『日本洋画史』2 昭和53年 日貿出版社 31～32ページ参照）。従って三宅が『思ひ出つるまゝ』の中で、明治美術展における高橋の水彩画に触発されて京都のスケッチ旅行に出立したのを1894（明治27）年1月としているのは、1895（明治28）年の誤りであろう。なお、この『思ひ出つるまゝ』の中には、ヨーロッパに渡る直前、およびロンドン滞在中の牧野義雄についても断片的に触れられている。

- 7) University of California, Department of Art: Karl Kasten 教授による。
- 8) これには次のような背景があった。

校名にその名を冠せられることとなった Mark Hopkins は鉄道の大立て者であった。存命中に妻のために、サンフランシスコの高級住宅街である Nobb Hill に大邸宅を建てたが、その完成をみぬうちに Hopkins は世を去る。Hopkins の没後、彼の妻は東部に移り、のちにマサチューセッツの Edward Seals と再婚するが、このSeals 婦人も亡くなり、Seals は妻の残したサンフランシスコの土地と邸宅を、記念すべき名をつけることを条件として San Francisco Art Association の使用に供するよう、州立大学の理事会に寄託した。以後、1906年のサンフランシスコ大地震によって建物が失われるまでの13年間、School of Designは Mark Hopkins Institute of Art と通称されていたのである。土地・建物の寄託先が州立大学であったことも関連して、サンフランシスコ美術学校が時として州立大学美術学部と呼ばれることもあったらしく、『審査官列伝』における井手馬太郎の経歴「加州大学美術部」は、こうしたケースとしても考えられるが、この場合、在籍期間が牧野義雄の『あさきゆめみし』の記述と合わない。（注5引用文参照）

Mark Hopkins Institute of Art 時代のクラス編成は人体・石膏・風景描写の3クラスであった。特にここで用いられた石膏像は、普仏戦争の戦傷者に対して、サンフランシスコ市が贈った30万ドルの義援金に対する、フランス政府の感謝のしるしとして贈られた、逸品揃いの石膏コレクションよりなっていた。

- 9) 前掲『あさきゆめみし』124ページ
- 10) 松本竜之助編『明治大正文学美術人名辞書』大正15 立川文明堂 471～472ページ
- 11) サンフランシスコ美術学校における各教員の在籍期間は、それぞれ次の通りである。
A. F. Mathews : 1889～1906, R. D. Yelland : 1877～1900, A. Joulin : 1887～1897, O. A. Kunath の在籍期間は不明ながら、カリフォルニアに滞在していたのは1878～1904である。
- 12) Arthur Frank Mathews は1860年10月1日、ウィスコンシン州の Markesan に生れた。7才の時、Helen Tanner Brodit に絵を学び、15才より19才までの間は、父の事務所で建築製図の見習いとして働いた。18才の頃からデザインコンペに出品し始め、20才でコンペの特賞を得ている。21才より24才までの間は、サンフランシスコの Britton and Rey Lithography Company に、デザイナー兼イラストレー

ターとして雇われ、1884年24才の時には、San Francisco Art Student's League の結成にも力があつたといわれる。

25才の1885年渡仏し、Academie Julian に入り、以後4年間、Gustave Boulanger や Jules Lefebvre の指導のもとに、絵画の研鑽にはげんだ。この Academie Julian は、わが国でも、美術評論家の草わけとして著名な岩村透や、安井曾太郎の学んだ画塾としてよく知られている。

帰国の1889年には、San Francisco Art Student's League に教鞭を執り、同年より California School of Design でも教え始めている。1890年、30才にして School of Design の校長に就任したことは本文において述べた通りである。

当時サンフランシスコは、「西部のパリ」と称せられ、特に美術面においてその共通性が高かった。一つには、1890年代にサンフランシスコにおいて美術教育にたずさわっていた人の多くが、パリに留学し美術の習練を積んでいたことにもよる。Mathews もその一人である。Mathews はパリにおいて、フランスのアカデミックなスタイルを身につけるとともに、1880年代後半にパリで花開いた新しい芸術思潮の多くをも吸収している。Academie Julian を離れた所では、印象派よりも詩的象徴主義の傾向の強い Chavannes や Whistler の影響を受け、また装飾スタイルの面においては、後期印象派やナビ派の影響の跡もみられるとのことである。

1894年、Lucia Klinhans と結婚、以後展覧会活動のかたわら、室内装飾にも手を染め、1906年の大地震の後では、出版・著述活動・家具の製造と販売に至る幅広い活動を始めている。

- 13) 牧野義雄『滞英四〇年今昔物語』昭和15年 改造社 3 ページ
- 14) 農商務大臣官房文書課「農商務省第十五回報告 明治二十八年度」明治29年10月 75～76丁 藤原正人編『明治前期産業発達史資料』別冊(22)－1 昭和42 明治文献資料刊行会 所収
- 15) 農商務大臣官房文書課「農商務省第十六回報告 明治二十九年度」明治31年4月 133丁 藤原正人編『明治前期産業発達史資料』別冊(22)－2 昭和42年 明治文献資料刊行会 所収
- 16) 農商務省工務局工務課『農商務省工務局臨時報告』第四冊輸出陶器 明治31年5月 1 ページ
- 17) 農商務大臣官房文書課「農商務省第十九回報告 明治三十二年度」明治34年4月 126～127丁 藤原正人編『明治前期産業発達史資料』別冊(22)－5 昭和42年 明治文献資料刊行会 所収
- 18) 前掲書 301丁
- 19) 農商務省商工局編「商工局臨時報告」第11号 明治33年 所収
- 20) 前掲書 9 ページ
- 21) 『東京工業学校一覧』明治32・33年 第一章沿革及組織 5 ページ
- 22) 拙稿「明治とデザイナー—東京高等工業学校工業図案科を中心に—」『夙川学院短期大学研究紀要』第2号 昭和53年3月、および「明治とデザイナー—大日本図案協会と雑誌『図按』—」『夙川学院短期大学研究紀要』第3号 昭和53年12月参照
- 23) 前掲『商工局臨時報告』第11号「工業図案法改良意見」2 ページ
- 24) 前掲『東京工業学校一覧』第四章教科及教旨 39ページ
- 25) 前掲『商工局臨時報告』3 ページ
- 26) 前掲書 5 ページ
- 27) 『東京美術学校・校友会誌』第19号 昭和15年 六角紫水(談)「学校創立当時回顧」15ページ
- 28) 前掲書 小場恒吉「図案科想ひ出」56ページ
- 29) 前掲『商工局臨時報告』6 ページ
- 30) 杉原忠吉編『図按』第11号 明治36年2月 1～5 ページ 所収
- 31) 鎗田徳之助編『技芸の友』第1号 明治38年10月 1 ページ
- 32) 前掲『夙川学院短期大学研究紀要』第4号および「明治とデザイナー—小室信蔵(1)—」『デザイン理論 19』1980年11月 意匠学会参照
- 33) 前掲『商工局臨時報告』7 ページ
- 34) 上野直昭編『明治文化史』第八巻 美術編 昭和31年 洋々社 242ページ